

プログラム・ノート

池原 舞

アメリカの作曲家、キャロライン・ショウ(1982～)は、クラシック音楽に他の種類の音楽を混ぜて、新しい響きを作ることに挑戦している作曲家です。『ヴァレンシア』(2012)には、変わった弾き方がたくさん出てきます。弦に指で軽く触れて高い音を鳴らしたり、弓を使わずに指で弦をはじいて音を出したり、弦の上で指を滑らせたりします。目でも耳でも楽しめるでしょう。

デンマーク出身のカール・ベアストレム＝ニールセン(1951～)の『Towards an Unbearable Lightness (耐え難い明るさに向かって)』(1992)という作品は、普通の楽譜に書かれていません。真ん中に大きな渦巻きがあり、その周りに音をイメージさせるような三角形や四角形が描かれています。演奏者は、渦巻き線を目で追いながら、思いついた音を自由に演奏していきます。「少しずつ音色を変化させて」とか、「ここで全員5秒から10秒休め」などの言葉の指示も出てきますが、何の楽器を使って、どのように演奏するかは、弾く人にまかされています。

アントニオ・ヴィヴァルディ(1678～1741)は、イタリアで生まれました。イタリアも日本と同じように南北に長い形をしているので、四季があります。このヴァイオリン協奏曲「四季」(1725)は、春夏秋冬の美しさや厳しさを表現した詩をもとに作曲されました。まるで音から風景が飛び出てくるようです。

「夏」は、焼けつく太陽の下で疲れた様子から始まります。第2楽章では、雷の音が聞こえ、悪い予感がします。予感が当たり、第3楽章では、雷やひょうが、せっかく育った農作物を叩き落としてしまいます。

「冬」の第1楽章は、寒さに震える場面です。それに対し第2楽章では、暖炉のある暖かい部屋の中にいる感じがするでしょう。屋根に打ち付ける雨の音も聞こえてきます。第3楽章で、つるつる滑る氷の上を恐る恐る歩きます。最後に風たちが争いを起こします。

ヴィヴァルディの「四季」を自分なりに変えてみたのが、マックス・リヒター(1966～)です。リヒターは、ヴィヴァルディの音楽の元の形を崩さずに、新鮮な感覚を生み出すにはどうしたらよいか考えました。その結果、新たなメロディを付け加えることはやめました。そのかわりに、もともとある音を繰り返したり、強く弾く場所をずらしてみたりしました。そしてこの曲に、「再作曲」という意味の「リコンポズド」(2012)という題名を付けました。